

## Ⅱ. 植 生 概 況

足利市はほぼ全域がヤブツバキクラス域に入るが、その現存植生は、大きく2つに分けることができる。すなわち、関東平野を中心とする市街地とその周辺に広がる耕作地および足尾山地を中心とする丘陵・山地の植生とである。耕作地は渡良瀬川以南の沖積低地に水田が広がっている。また水田は、名草川、田島川、袋川などの河川流域に沿って山あいまで延びている。最近では一部の水田で、畑作への転換が行なわれている。栃木県や群馬県は昔から二毛作の盛んな地域で、裏作として小麦が栽培されてきた。現在では小麦はかつての面影はないが、替って商品作物としてビール麦の栽培が盛んになってきている。6月頃の麦秋は仲々見事である。

平野部の丘陵はアカマツ林が卓越している。これらのアカマツ林は、大部分が植林を含めた二次林であり、種組成的にはクリーコナラ群集にまとめられる。

山地に向かうにつれて、斜面や谷筋にはスギ、ヒノキ植林が広い面積を占めるようになる。山地部でもアカマツ林は尾根などに生育している。また、これら針葉樹に混って、クスギーコナラ群集、クリーコナラ群集などの夏緑広葉樹の二次林もみられる。



Fig. 4 銚阿寺のスダジイ植栽。みごとに発達している。

Gut entwickelter Tempelwald des *Ardisio-Castanopsietum sieboldii*.  
Der Tempel Bannaji wurde im Jahr 1196 gebaut (20m, ü. NN).

潜在自然植生では、足利市の大部分がシラカン群集域と考えられる。本調査対象域でも、スギ、ヒノキ植林の林床にはシラカンの実生や幼樹が頻繁にみられる。また、名草の足利自然公園には、二次的ではあるがシラカン林が残されている。これらのことから潜在自然植生としてのシラカン群集の成立が裏づけられる。また、平野部では庭木としてスダジイが良く植えられている。特に、足利氏の菩提寺である鋤阿寺には、見事なスダジイの植栽がみられる。このため、平野部の一部には、土地的にヤブコウジースダジイ群集の成立も可能と考えられる。宮脇らは、関東内陸部の関東平野末端では、日当たりが良く乾燥し易い小丘陵地にヤブコウジースダジイ群集の潜在自然植生域を認めている（宮脇編 1986）。

シラカン群集の潜在自然植生域は、山地部でも広い面積を占めている。しかし、仙人ヶ岳（663 m）の山頂部付近にはイヌブナがみられ、一部ではあるがコハクウンボク-イヌブナ群集、クリ-コナラ群集などブナクラス域下部の夏緑広葉樹林であるイヌシデーコナラ群団の潜在自然植生域となっている。また、名草付近にはブナクラス域に生育するミズナラが、海拔 150 m 付近からみられ優占林を形成している。この傾向は隣接する桐生市においても認められ、足尾山地下部にみられる特徴的な現象である。このミズナラ林は二次林と考えられるが、潜在自然植生との関係が興味深い。